

里山グループ



エコファームグループ

◆里山は楽しい所

阿部 和生

年寄りには忙しい！といったら笑われるだろうか…。加齢による病(やまい)への対処や、いつか整理しようと思っていたダンボールの数々等、あれもしなければ、これも片付けなければと気ばかり焦る忙しさが、その因かもしれない。

この「ならやま」は、そうした日常から切り離されていて里山という共通する意識を持った仲間と一緒する場所でとても貴重です。この地区の景観整備に始まり、徐々に受け持ち区域が広くなりました。さらに「ナラ枯れ」という予期せぬ事態が生じ、現在ひとまずの終息を迎えています。いつしかどのグループも常に多忙という現象が現場に残されてしまったように思います。

この地区の原点は里山林整備ですが、今一度振り返って「ゆったりとした活動日・楽しむ一日」を特別に設けることができれば、多忙の中に違った楽しみや愛着が生まれるだろうと感じます。

毎週の活動日以外の日に自由参加で里山林に入り山の霊気を身体に受け、のんびりと過ごす一日を作れないだろうか？平日でも祭日でも毎月一回程度あるいは適宜に実施するのです。当日は家族や孫たちが来ることもあろう、それも可。下草を刈り、枝葉の始末、落ち葉かき等軽作業。春の芽吹き、ツツジの群生、濃緑の観察路散策、黄葉の楽しみなど季節の山の観賞。周囲の散策そして少しおしゃれな昼食とお喋りの時間。朝礼も終礼も簡素に、事前に計画して自然工作も良いかもしれない等など思い浮かびます。

この里山林の魅力を満喫することに主眼を置いた一日を設けられれば楽しいだろうな…！作業に加わらなくても散策や昼食とおしゃべりを目的に加わることもOK。

そんなゆとりを持った、山を知る、観る、触れる活動日があれば良いな……。

◆農具小屋の表札

岡田 安弘

ならやまの活動に初めて参加した2017年10月12日は小雨。朝6時44分、京阪に乗車、近鉄、奈良交通バスと乗り継ぎ、朝礼の30分前に到着。日記に詳しく書いている。

見学の8人は観察路を登る。松林に出た。若い松の木の周りで、熊手を持つ10数人が下草や小石をかき集めていた。リーダーらしき男性が、新顔の我々を見て「特用林産物に腐葉土は邪魔なんだよ」と言う。今日は面白くなりそう、わくわくしてきた。

農具小屋に案内される。戸口の上、幅1m、縦10cmほどの横板の表札に目が止まる。黒い太文字で「ECOFARM」とある。この表札が、人生のリセットボタンとなった。

▽

「ボランティアを始めたそうじゃないか。エコ班と書いているが何のこっちゃ?」。年賀状を見た友人から電話。即答できなかった。そもそもスーパーで「エコポイント」に首を傾げ、見当はつくが自信がもてないままだった。

世の中、「エコ」があふれている。とうとうパソコンの世話になった。検索すると、「エコ」は接頭語。環境に配慮する全ての事柄の帽子のようなもの。エコノミーのエコはギリシャ語のオイコス(家)、ノミーはノモス(管理)。合わせて「家計のやりくり」。これが「経済学」となる。エコロジー(生態学)もしかり。「環境」と「学」の合体だった。

「経済」と「環境」。こじつけではない。環境を守って、経済が衰えては元も子もない。環境に配慮し、なおかつ経済を発展させることが望ましい。これが難しい。近年の環境破壊に、経済活動が絡んでいるのは明白。「1万2千歳の経験と知恵」で、どうにかしたいものだ。